

険を認知しており、気候と社会の因果関係を安易に想定したり、熱帯社会を自社会の批判のために理想化したりすることを慎重に回避している。しかし、だとすれば、あえて熱帯社会をタイトルに掲げるだけの必要性はあるのか、という問題がある。気候帯としての熱帯社会に特有の現象を、人間圏の再構想という課題に結びつけて論じ切っているのは、孫論文だけではないだろうか。熱帯社会という地理的な枠組みに基づく地域研究をさらに展開していくためには、生態・地理条件に基づく長期持続を基調にしつつも、本書のなかでも何人かが試みているように、人間圏の中期的な社会変動をとりわけ丁寧に描くことが必要だといえる。

黄 蘊.『東南アジアの華人教団と扶鸞
信仰—徳教の展開とネットワーク化』風
響社, 2011年, 350p.

北澤直宏*

本書は、マレーシア、シンガポール、タイにおける華人民間宗教結社の発展過程を上記3カ国の社会的文脈の下に分析し、そこにおける移民—宗教関係を考察したモノグラフである。華人宗教はこれまでも多くの研究蓄積のある分野であるが、儒・仏・道・民間信仰の混合や寺院・廟・会館のような類似施設の重層的な存在は、曖昧さと多義性という側面から研究者を悩ませてきた。

本書は幅広い地域・組織を扱っているが、

なかでも主な考察対象となるのはマレーシア・ペナンにある徳教団体である。徳教とは扶鸞という交神術から得られる託宣を核に1939年の中国潮州で誕生した宗教慈善結社であるが、近年は文化・教育などの領域へ進出しており、類似の宗教結社と比べてもその発展は著しいことが特徴とされる。

まずは序章を通して、本書の問いを概観する。華人の信仰は普遍主義を掲げる傾向があるものの、実際には華人性が濃く、その閉鎖性は否めない。このような特徴は異国において彼らの民族性（華人性・潮州人性）の維持に大きく貢献してきたことは事実としても、その伝統の維持が過度に論じられてきたきらいがある。これに対し本書は、当該国の社会状況と華人結社自体の変化に着目し、なかでも宗教実践をみることの重要性を指摘する。いかに徳教が教団化され、独自の変化を遂げたか、そして教団のイデオロギーはどう変化しているのか。これが本書を貫く問いとなっているのである。

以下では、序章と、簡単な総括が行なわれる終章の間に存在する1-6章について、順に整理していきたい。1章「徳教の前史—扶鸞結社と徳教」では、中国本土における徳教誕生の背景が歴史的な視点から考察される。清代から始まった社会不安と儒教的教化の勃興は、多くの慈善団体・宗教団体を誕生させた。その担い手となったのは旧秩序体制を支えた士紳階層であり、それに権威を与えたのが扶鸞である。扶鸞自体は古来より行なわれてきたものであるが、19世紀末から広がった末劫説はこの全国的な流行を生み出し、特

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

に潮州地方では儒教的価値観をもった商人が、道徳・宗教・慈善の要素を含んだ扶鸞結社の活動を支えるまでになっていた。そのようななか、初期の徳教は「伝統的倫理教化を可視化」(p. 90) するものとして誕生し、やがて社会主義化した中国での活動とは対照的に、東南アジアでその活動を活発化させていくのである。

2章「東南アジアの華人コミュニティと華人民間教派の展開」では、3カ国における華人コミュニティの発展と、そのなかで商人層が果たした役割が分析される。移民先において華人たちが方言・出身別にまとまり、さまざまな互助組織を形成することは珍しくない。その結果誕生したさまざまな華人組織に共通しているのは、その頂点に立つのが例外なく商人層であることである。儒教とは相容れないこの特徴の説明として、著者は経済的成功を目的として海外進出した華人にとって、その関心は経済面にこそある点を指摘している。また、他にも共通する傾向として、宗教的知識の欠如や人材不足に対する改革が迫られていることが示される。これら諸問題への対応には組織ごとに差異がみられるものの、その混沌にこそ華人結社が有している伝統の非完全性を垣間見ることができるのである。

3章「マレーシアにおける徳教の教団的展開」では、マレーシアにおいて特に徳教の発展が著しい理由が考察される。商人が主導する教団の活動は世俗的なものが主であり、それを通して彼らは社会的ネットワークを構築するだけでなく、名誉・威信を得ることに成

功している。徳教のこのような特徴は信者の需要や社会状況への適応を容易にさせており、次第に類似団体との差異化を図り、組織を整え文化活動にも進出させる要因にもなっていった。これは徳教が抱える伝統が少なかったからこそ可能となったものであり、現在の発展の礎ともなっている。しかし一方で、求心力が託宣にあり続けたため「一部華人住民の関係性の上に成り立っている」(p. 185) と表現されるように、組織としての不安定さは否めない。

4章「徳教と潮州人性、商人イデオロギー、または神意」では、徳教がいかに地域社会で定着していったのかが説明される。商人の影響力は扶鸞に携わる宗教職能者すら凌ぎ、教団人事だけでなく託宣の内容にも影響を与える。しかし同時に神意が絶対性を有し続けているのも事実であり、商人たちは多額の寄付金を通し教団運営を支える代わりに神の庇護を得るといふ、互酬的な関係を築いている。著者は、この関係を人神共同と呼び、権力をもつ一方で神意にも導かれる商人たちの現状を指摘する。そこにおける宗教職能者とはあくまで二次的な存在であり、中心にあるのは潮州人性、商人性である。歴史的にも潮州系商人の人脈が徳教の拡大に寄与してきたことは事実であり、今日もネットワークこそが新規参入者の増加に貢献しているのである。

徳教教団は拡大に成功したが、同時にそのイデオロギーをめぐる論争が活発になり、近年は教団の宗教性を強化しようとする傾向が生じている。その過程と背景を考察したのが5章「徳教の教団イデオロギーをめぐる論争

と教団建設」である。その際に論点となったのは扶鸞の廃止・理論化の是非であった。本書ではその背景として、世俗的なものだけではなく精神的な充足感をも求めるようになった商人層が教団の将来に不安を抱き、理論化・宗教化を望むようになったことが示されている。しかし一般信者は依然として扶鸞のみ関心があることから教団内部に矛盾が生じ、一部団体では扶鸞の復活も起こっている。確かに近年は理論化の推進・教理建設・書誌編纂・中国本土へのルーツ探し等も活発になってきてはいるものの、やはり依然として徳教団体間の統一は実現されていない。

6章「徳教のトランスナショナルな拡大とネットワークの建設」では、今日における徳教団体同士の相互欠如と連帯から、華人宗教結社の特性が考察される。組織の中心にある商人層は、彼らは自分たちの「需要や知識レベルに合わせた」(p. 304) 教団を形成し、発展させてきた。80年代からは世界的な徳教大会が開催されるようになり、各国の関係者の連帯が図られているものの、やはり統一性の欠如は否めない。しかし筆者は、その組織的せい弱性が華人宗教の発達を促していると指摘する。このような発展過程や近年の動向を分析したうえで、著者は華人宗教の本質を、教理の深化ではなく、拡大過程におけるネットワークの形成に見出しているのである。

では、本書の特徴とは何なのであろうか。当該社会における華人コミュニティの描写が秘めている価値については言及するまでもないので、以下では敢えて別な視点から付け加

えることにしたい。

本書は、「一般的な定義を求めるというものではない」(p. 31) と前置きをしているように、宗教実践を描いたものである。しかしながらその背景にあるのは、西洋基準による宗教観が浸透する前にあった、伝統的な華人信仰の形を明らかにしようとする著者の姿勢である。しかし彼らの信仰は判別し難く、実際に本書の記述からみえてくるのも華人教団が抱えている混沌性と流動性である。しかし本書はその指摘に留まるだけでなく、組織としてのせい弱性や潮州系商人たちのネットワークを丹念に描くことで、その雑多性を前提とした組織の拡大過程こそが華人系宗教団体の本質であると論じることに成功している。他団体との緩やかな連帯と相互扶助を通して徐々にネットワークを拡大していく機能に華人の宗教性を求めたことは注目に値するものであり、これは中華圏の宗教を考察していく際に有効な概念として、今後の研究に大きく寄与していくものと思われる。

2点目は、第5章の主題ともなった扶鸞の是非を巡る論争に関係する。これは不安定な託宣を放棄し教団の組織化・合理化を図ったものであり、大きくいうとカリスマの日常化が焦点となっている。従来カリスマを述べる際には血筋や役職に焦点が当てられてきたが、このような託宣の存在も無視できるものではない。本書はこの運動の担い手や社会的背景まで分析しており、これは現代における宗教の変化を考察しようとする、著者の視野の広さを示すものである。尤も教団と個人間の葛藤は継続中であり、これだけでは単純に

徳教が合理化へ向かっているとは言い難い。しかし読み手に対して教団の今後更なる変革を予感させる描写の数々は、本書がいかにか意欲的なモノグラフであるかを表しているといえるだろう。

次に問題点について述べる。それは徳教の核でもある扶鸞の扱いであり、そこに一貫性が欠けていたことが、教団外部に存在するはずの華人コミュニティに関する描写を犠牲にしまったように思われる。穿った見方になるが、そもそも部外者にとっては全ての託宣が人為的なものでしかない。確かに、扶鸞に現れる神意に人意が介入する可能性は言及されているが (p. 84, p. 164, p. 214)、それでは何故黎明期の扶鸞の多くは無批判に引用されているのかとの疑念が浮かぶ。また今日の一般信者の宗教実践に関しても、位階制の存在や神の万能性を示唆するだけでは、その影響力の理由を十分に説明できるとは言い難い。敢えて教団を去っていった者や、扶鸞の肯定・否定の裏にある世俗的な側面について重層的な記述をすることで、より説得力を増すことが可能だったのではないだろうか。

しかしながら、これは本書の価値を損なうものではなく、宗教人類学を基本としながらも宗教社会学まで射程に収めている幅広さ故に生じた問題であろう。3ヶ国の華人社会における、多くの類似組織を比較調査した著者の視点・手腕は感服に値するものであり、本書が多くの領域から関心を集めることが可能な一冊であることは間違いない。今後、より長期的な考察がなされることを願ってやまないものである。

須永和博. 『エコツーリズムの民族誌ー北タイ山地民カレンの生活世界』 春風社, 2012 年, 435 p.

田崎郁子 *

カレンはタイ国に居住する少数民族として最大の人口を占め、タイで「山地民」と称される人々の位置づけを考える際に重要な存在である。カレンと森との関りや生業のあり様は、常に民族表象と結び付けられて語られてきた。特に 1980 年代以降、タイでの環境保護運動や NGO 活動の高まりを背景に、NGO や一部の指導的なカレンらが土地権主張の運動を展開し、森と共生する知恵をもつカレン像を強調するようになると、これに関する人類学的研究も蓄積されていった。しかし、近年のカレンの森林利用や環境運動との関連で民族表象を取り扱った先行研究では、その政治的意義を「社会的弱者による抵抗か、外部者によるカレンのロマン化か」と大局的に論ずる傾向にあった。そしてそこでは、実際に運動や言説が一般のカレンの人々にどのように受容され影響を与えてきたのかが見落とされてきた、と著者は指摘する。これに対して本書は、カレンの人々が村で携わるエコツーリズムの実践を例に、観光と森林利用や少数民族であることへの関りをめぐって生起するさまざまな立場の人々の交渉や調整に焦点を当てている。それによって、ミクロな視点から上記の二項対立には回収されない少数民族のあり方を示し、ローカルな生活

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、
日本学術振興会特別研究員 (PD)